

〈西洋理性〉 批判

—人間理性が求めるのは「〈实际的經驗的実証性〉に基づく真理」か、
「〈実存的実践的実証性〉に基づく意味」か？
—そして理性の本性は「神性」か、「魔性」か？

小林 栄三郎

Eizaburo Kobayashi

青山ライフ出版

目次

第一章 人間・人類の類的特性としての「言語」と「理性」……………5

―「言語」による知能の「理性」への進化、人間・人類への道としての「理性」、

そして「理性」への道としての「言語」

第二章 遺伝子レベルを超える西洋理性の種族的特性としての「科学・技術的理性」……………73

―客観的普遍的知識に関心をいただき、原理を発見し原理を説明する「科学的理性」、

及び神の全知全能に迫る「科学の神性と魔性」

第三章 西洋理性の種族的特性としての「へ存在するものの存在の目的」

意味をデザイン・投企する）形而上学的・哲学的理性」……

— 理性の二種類の真理性（科学的理性の「経験的実証性」と形而上学的・哲学的理性の

「へ実践的・実存的」実証性」

219

第四章 西洋理性の種族的特性としての「コミュニケーション的理性」と

「コミュニケーション的合理性」……

335

— 「主観性」から「間主観性」、「主観的・実践理性」から

「間主観的・コミュニケーション的理性」への進化

第一章 人間・人類の類的特性としての「言語」と「理性」

— 「言語」による知能の「理性」への進化、人間・人類への道としての「理性」、

そして「理性」への道としての「言語」

1. 1. 1. <リングイスティック・ターン>による、「知能」の「理性」への進化

(ここで言うリングイスティック・ターンとは、言語論的に最もよくその過程の説明のつく知能の構造転換のこと)

—動物レベルの「実際的・実用的知能」から人類レベルの「道具的・技術的理性」への進化、及び古代ギリシアにおける「自然学・科学」と「形而上学・哲学」の誕生または発明

人間と動物はどこが違うのだろうか。人間と他の生物・動物との違いを表わす、人間・人類の特性は「理性」にあることを明言した最初の人は、紀元前4世紀の古代ギリシアの哲学者アリストテレスであった。アリストテレスには、その『靈魂論』(岩波版アリストテレス全集、第六卷)に、人間を他の動物から区別し、人間を人間であらしめている属性として「理性」を論じた「人間理性論」がある。そこでアリストテレスは、植物には「栄養作用の靈魂」があり、動物にはそれに加えて「感覚作用の靈魂」があり、人間には更にそれに加えて「理性の靈魂」があるとしている。言うまでもなく、ここで言う「理性の靈魂」は「理性」という知的能力」と読み替えることができるだろう。

人間・人類が生物・動物の生存条件を乗り越えて、人間独自の文明的生存条件を創出したのは、その知的能力が「理性」と呼ばれるにふさわしいレベルにまで進化し、発達したことによる。人間の知能が進化し、

発達して、本能と遺伝子に書き込まれたプログラムの支配からたとえわずかでも離脱し、ものの見方・考え方・行動の仕方・生き方に多少なりとも「精神・心の自由」を得るに至ったとき、その知能は「理性」と呼ばれ、動物から類別される、「人間」または「人類」という存在の本質的特性となったのである。「理性」が、自然・本能の支配と必然性、遺伝子の支配と宿命から人間を解放し、人間の思考と行動にわずかなりとも「自由」をもたらしたとき、その時に「人類の歴史」は始まったのである。

人間と動物を区別する尺度ないし規準を「理性」に求めるといふ考え方に、異論を唱えようとする人はまづいないだろう。西洋文明に属している諸民族・諸国民の言語には、それぞれに固有の言い方で、「人間は理性を具えた動物である」、つまり「人間と動物の違いは理性の有無にある」、という考え方につながる慣用的表現が必ず存在している。例えば、英語で、*Animals have no reason*。「動物には理性はない」、仏語では、*La raison distingue l'homme de l'animal*。「理性によつて人間と動物は区別される」、独語では、*Der Mensch ist ein vernunftbegabtes Wesen*。「人間は理性に恵まれた存在である」などと言われている。「理性」という語は、人間の本質的属性として特別な位置を与えられている。少なくとも西洋の諸言語の中で、「人間は感情の動物である」などということ、真面目に言う言語があることを私は知らない。西洋の諸言語、及び諸民族・諸国民は、人間の本質的特性として、何よりもまず「理性」を挙げているのである。

人の「ものの見方・考え方・行動の仕方・生き方」を決定する役割を担っているのは、人の「精神」または「心」であるとしよう。英語で言う *mind*、仏語で言う *esprit*、独語で言う *Geist* である。こうで言う「精神」または「心」とは、人間という存在を構成する「精神と肉体」または「心と肉体」という〈二項構造〉表現

の一つであり、感覚・知覚、理性・悟性、思考・思惟、感情・意思、志向・関心などの「認知」cognitionの諸要因を統合したものである。これらの「精神・心」の諸要因を「理性的要因」と「感情的要因」とに分けて、どちらかと言えば「理性的要因」が強く働く場合は、これを「精神」と呼び、どちらかと言えば「感情的要因」が強く働く場合、これを「心」と呼ぶことができるだろう。そうすると、「心」がより優位に働いている東洋人の場合に比べて、古代ギリシア以来の西洋の知識人・思想家の場合は、「精神」がより支配的、より中心的役割を果たしてきたと言えるだろう。つまり、西洋の知識人・思想家においては、「理性」が「精神」または「心」を構成する認知的諸要因を統合する、中心的役割を担ってきたのである。

類人猿を先頭に犬猫、カラス、イルカなど、動物に「知能」が有るとはよく言うが、動物に「理性」が有るとは普通は言わない。心理学者ヴィオー(G. V i a u d)は、人間と動物の知能的行動を区別して、動物のそれを「感覚運動的知能」または「実用的知能」、人間のそれを「観念・概念的知能」または「論理的知能」と呼んで区別している。前者の「感覚運動的知能」は物理的環境に適応する機能を果たし、人間と動物が共有する共通の知能と見なし、後者の「概念的・論理的知能」は観念・概念、または言語(言語的観念・言語的概念)を媒体として伝達・意思疎通、及び知的な認識・推理・思考を可能にし、動物には存在しない、人間に固有の知能であると考えている(平凡社『心理学事典』、1981年11月、初版第1刷、574〜5頁)。

西洋の「理性」の歴史に関する或る記述によると、紀元前7〜6世紀の古代ギリシアのミレトスのタレスによって、当時は「自然学」呼ばれた「科学」が誕生し、紀元前5〜4世紀のアテナイのソクラテス／プラトンによって開発されて「哲学」が生まれた。この「科学と哲学」の誕生以前には、「ほとんどの知識は「実

「實際的・実用的な知識」だった。その中身となっていたのは、狩猟と穀物栽培、家事のやりくりや都市の政治、芸術の創作や戦争の方法、といった作業・事業に成功するための実用的な諸規則であった。このような「實際的知識」know-howのゆつくりした蓄積は、数千年にわたって進行してきたのである（チャールズ・ヴァン・ドールン『知の全体史』、叢書・ユニベルシタス、法政大学出版社、1999年11月、第一版第1刷）。古代ギリシアで「科学」と「哲学」が誕生する以前は、人間の知能はもっぱら「實際的・実用的知能」、つまり「道具的・技術的知能」から成っていたのである。

また一方で、人間は物を作るのみでなく、物を作るための道具を作り、その道具を使用し、生きるために必要な物を作り出し、そして、物質的生活を再生産する知能と技能を取得したとき、人類は初めて他の動物たちの「知能」のレベルから分化し、人類固有の「理性」に基づく文明への道を歩き出したと言われる。そして、この「道具の製作と使用」、「物質的生活の再生産」、そして、「道具・技術の知能」の進化の歩みが始まったのは、人類が「直立二足歩行」を始めた瞬間からだと言われる。四足歩行から解放されて、自由になった「2本の手」が物を作り出す可能性を生み出したのである。歩行から解放されて自由になったこの「両手」が、人間の生活のために有用な「實際的知能・技能」、または「道具的・技術的知能」の発生を可能にし、その進化・発達を促したのである。

或る科学事典によると、人類が「直立二足歩行」を始めたのは、今から約360万年前と言われる。そして、現在発見されている最古の「石器」は、今から約200万年前のものと言われる。この石器時代以来、人間は自分たちに有用な物あるいは道具を作り、使用する能力を、気の遠くなるような長い時間をかけて、「理

性」と呼ばれるにふさわしいレベルにまで進化・発達させてきたのである。(講談社『MEGA科学大事典』昭和60年3月、第1刷、「人類の誕生」214〜7頁)。

人類の歴史の上で、紀元前7〜6世紀に「自然学または科学」と、紀元前5〜4世紀に「形而上学または哲学」が古代ギリシアで誕生する前に、「石器」を作り、使う能力を始めとして、人間の生存に関連する〈実際のな知能・技能〉、つまり「道具的・技術的知能」が生まれ、何十万、何百万年の時間をかけて、ゆっくりと進化・発達を積み重ねてきたのである。人間・人類のこの〈実際の知能・技能〉の発生と進化が、先ず最初に人類の歩んだ道を他の動物のそれから分化させ、人類独自の文明への方向を決定したのである。エジプト、メソポタミア、中国、インド、マヤの文明が開拓された頃には、〈実際の知能・技能〉として、明らかに既に「テコ、クサビ、車輪・車軸、滑車、ネジ」などの、素朴で基礎的な道具・器械・技術が知られていたと考えられている。古代ギリシア・ローマの時代には、この〈実際の知能・技能〉、または〈道具的・技術的知能〉は、これらの知能を追いかけ、並行して進化・発達し、やがて誕生しようとしていた「科学的理性」と呼応して、「道具的・技術的理性」と呼ばれるにふさわしい高度な知能レベルに到達していたのである。テコやクサビなどの基礎的な道具・技術も、最初は自然に起こる偶然的な出来事によって見出されたものであったが、アルキメデスの「テコの原理」のように、その作用の〈力学的・物理学的原理〉が解明され、発見され、そして「〈原理・原則を探究する〉科学的理性」が誕生した時には、これと相互作用・補助の関係によって、〈道具的・技術的知能〉も「理性」の段階に入っていたのである。

古代ギリシアの最大の数学者にして物理学者、アルキメデス(紀元前267〜212)は優れた技術者でもあった。彼は、円の外接と内接の96辺形から円周率 π を算出したり、「テコがなぜどのように働くのか」

を説明する、「テコの原理」を解明したことなどで知られているが、また、祖国シチリア島のシラクサのローマとの戦いに際して、数々の武器を発明して、ローマ軍を悩ませたことでも知られている。

「なぜそのような現象が起こるのか」を説明する、「科学的理性」の進化と発達と共に、「なぜ器械・道具がそのように働くのか」という〈原理〉を知ることによって、器械・道具をどのように改良したらよいか、如何にしてより効率的な器械・道具を作り出すことができるか、ということを知ることができるようになる。西洋の「技術的・道具的理性」は「科学的・理論的理性」と相呼応し合いながら、互に進化・発達を促しつつ、共に進化し、発達したのである。〈原因・原理〉を探究する「科学」と〈方法・道具〉を探究する「技術」との一体性は、「テクノロジー・科学」という「現代の科学」の特色であるのみならず、もともと「西洋の科学」そのものの本性であったのである。

「科学」の質は、「〈科学の原理に基づく〉技術・道具」の発見・発明、「〈対象を観察する〉技術・道具」の開発・発明に大きく依存するという。この「科学」の〈技術〉性または「科学と技術との一体性」は、近現代に発生し発達した現象であるにとどまらず、西洋の古代において既に始まっていた、「科学」と「技術」のそれぞれがもともと具えていた、「科学」と「技術」それぞれの本性であったのである。「〈或る現象が起きる原因・原理〉に関する科学的知識」は、「〈その現象を起こす方法・技術〉に関する道具的・方法的知識」でもある。「〈原因・原理〉に関する関心」は「〈方法〉に関する関心」でもある。「科学的理性」は「道具的・技術的理性」とは本質を同じくしているのである。

「道具を作り、使用する知能」について、マルクスはこう語っている。「労働手段とは、労働者が自分と労

働対象との間に挿入して、労働対象に対する自分の働きかけの導体として役立たせる物、またはそういう物の複合体である。労働者は、物の機械的、物理的、化学的特性を利用して、他の物に働きかけ、この他の物を自分の目的に役立たせる。「中略」労働手段・道具・道具の制作とその使用は、萌芽としては既にある種の動物に見られるけれど、人間特有の労働過程を特徴づけるものであり、それゆえフランクリンも人間を道具を作る動物と定義しているのである」（マルクス『資本論』第一巻、第三編、第五章、第一節）。

「人間は理性を具えた動物である」と言うとき、その「理性」には何よりも先ず、「人は自らに自然に具わっている能力を拡張する道具を作り出し、その道具を使って生存する動物である」ということ、及び「实际的・実用的な」道具的・技術的理性」が含意されているのである。マルクスはフランクリンと共に、人間の「道具を作り、使う能力」、つまり「道具的・技術的理性」に、人類を動物から類別する人間の類的特性を見ているのである。

また、人間・人類の「知能」が「理性」と呼ばれる高度な知能への進化・発達するのを可能にしたのは、何よりも先ず「言語」と呼ばれる道具・技術の発明または誕生であった。人間・人類はこの「言語という道具・技術」によって、知能または理性を「本能または遺伝子」の支配から解放し、「精神または心」の自由を可能にし、人間・人類の知能の「理性への進化・発達」を実現したのである。動物レベルの知能は、「個体と種の保存」という目的のためにかなりの仕事を可能にするが、本能・遺伝子の支配からの自由のレベルには達することはない。動物にも存在するレベルの知能は、人間において初めて「理性」と呼ばれるレベルに高度化したのだが、この「知能の」理性化」という知能の高度化は、「言語」を媒体として初めて可能になったのである。

1. 1. 2.

「〈認知能力の理性化を可能にした〉言語の誕生または発明」、及び「〈感覚知覚的な動物的知能から言語的人間的理性への〉進化」

—「ヘリングガイスティック・ターンによる」機能分化を伴った西洋の知能の理性への進化（言語的理性、道具的・技術的理性、科学的理性、コミュニケーション的理性、形而上学的理性、哲学的理性）

自然環境に適応し、物質的生活の再生産に対応する〈実際のな知能〉、人間が動物と共通に有している〈感覚知覚的な知能〉を、「理性」と呼ぶにふさわしい高度な知能レベルに進化・発達させるには、「言語」という、「〈観念・概念を表わし、観念・概念を意味する〉記号体系」の誕生または発明が必要であった。この「言語」という記号体系の誕生または発明も、「道具的知能」の何万何十万という年月をかけての、「〈シンボル・象徴とサイン・記号に関する〉経験と知識」の蓄積の成果であった。「言語」の発生と進化の過程は、「人間理性」そのものの発生と進化の過程と並行し、一致するものであった。人間の「知能」の「理性」化をもたらししたのは、「言語」という記号体系の誕生または発明であったのである。人間の「知能」は、この「言語」というメディア・媒体または道具の誕生または発明によって、時間・空間の隔たりを超えて、より高度な質と量の〈伝達〉、より高度な質と量の〈コミュニケーション〉を可能にしたのみでなく、より抽象的、より複雑、より精密、より高度な質と量の「認知」（認識・理解・解釈・判断・推理・思考等）が保証されたの

である。こうして、人間の「理性」は「言語」の誕生または発明と共に発生し、「言語」と共に進化し、発達したのである。つまり、人類が動物と共有する「感覚運動的で実地的な知能」のレベルから、人間に固有の「観念的・概念的で論理的な」理性」のレベルにまで進化・発達したのは、「言語」体系の誕生または発明の諸成果を契機とするものだったのである。

人類が「文明への契機・可能性を具えた存在」としての人間・人類」になるためには、「実際の知能」の「観念的・概念的」言語的理性」への進化・発達、「感覚に基づく知能」から「言語」をメディア・媒体とする理性」への進化が必要だったのである。「科学」や「哲学」などの西洋の「理性」の発達と発展の基本的な方向が開けるためには、その出発点に、「感覚に基づく」動物的知能」から、「言語に基づく」観念的・概念的・言語的理性」への進化の過程、つまり「リングイスティック・ターン」(言語論的転回)がなければならなかったのである。

20世紀の言語学者チョムスキーによると、「言語」が生み出す「語」と「文」は無数の自己拡張の可能性を持つている。しかし、チョムスキーが論じた「有節言語の語彙と文」の「限らない創造性」、つまり、限られた数の音素・形態素・語・文の組合せ・結合による「限らない造語と構文の可能性」という、「有節言語としての」言語の創造性」については、既に19世紀の「進化論」のダーウィンがこの「言語の創造性」を、動物と人間を区別する人類の特性として論じていたのである。「下等な動物と人間との相違は、人間が非常に多様な音声と観念とを結び合わせるほとんど無限に大きな力をもっているということだけである。そしてこのことは、明らかに高度に発達した人間の心理的能力によっているのである」(ダーウィン『人類の起源』)

中央公論社、世界の名著39、昭和42年9月、初版147頁）。人間・人類の限らない「文明」への道は、限らない〈拡張可能性・創造性〉を持つ「有節言語」としての言語、及び「言語をメディア・媒体とする」言語的理性」を基盤として初めて可能になったのである。

かつて20世紀の初頭の西洋で、人間の「認知」（ものの見方・考え方）には、「言語」というメディア・媒体が決定的な要因として働き、すべての科学・学問においても「言語」という記号体系はその基本的な基盤として重要な機能・役割・意味をもっている、という認識と考え方が広まった。その結果、すべての科学・学問において、この「言語」と「言語学」への関心が高まり、それぞれの科学・学問における「言語」の意義についての考察・検討が行なわれた。このような諸科学の「言語」への関心の高まった風潮が「リングゲイ・スティック・ターン」（言語論的転回）と呼ばれた。人間の〈知能〉から「理性」への、何十万、何百万年という長い進化の過程のどこかで、〈記号〉と〈言語〉への関心が生まれ、「〈言語的〉意識」または「〈言語的〉知能」が目覚め、「言語」の誕生または発明への動機が発生したはずである。まさにこの「〈自然的・本能的実際の知能〉から〈観念的・概念的言語的理性〉への進化」は、人類の古代史のどこかで起こったはずの「リングゲイ・スティック・ターン」（言語論的転回）の結果であったのである。

「理性」と呼ばれる人間の高度な〈知的能力〉は、先ずは人が生存のために主として関わる世界の二つの領域で誕生し、そのそれぞれの固有の進化の道をたどり始めたと考えられる。この人間の生存のための2種類の世界との関わりとは、先ず第一に「衣食住」に関する「物質的生活の再生産」の領域である。人間が物質

的生活手段を自ら生産し、そのための道具を製作し始めたとき、その労働手段と道具を自ら考案し、製作し、使用する〈技術的・道具的知能〉が生まれたのである。第二には、個々・一人一人の力では対応しきれない事態、例えば強力な敵に対する防衛、またはマンモスのような強大な猛獣の狩猟のためには「集団の共同の行動・作業」が必要になり、そのためには最低限の意思疎通、〈伝達とコミュニケーション〉の知能が有効であることを人は知るようになる。そして、人が経験したこの2種の〈実際の知能〉、つまり〈技術的・道具的知能〉と〈伝達の・コミュニケーション的知能〉が〈観念的・概念的・言語的知能〉と相互の密接な関連のうちで進化・発達し、やがて総体的に「〈言語を媒体として言語の意味としての観念・概念を操作・処理する〉言語的理性」のレベルに到達するのである。

そして、「言語」と「言語的知能」がこの2種類の知能、〈技術的・道具的知能〉と〈伝達の・コミュニケーション的知能〉との相互関連の中で生まれ、進化・発達した。集团的・社会的な共同行動のための、或いは相互理解と合意形成のための「伝達の・コミュニケーション的知能」の進化と発達のためには、長い時間をかけた徐々に進化的過程を経ての、「言語」という記号体系の誕生または発明が不可欠であった。「言語」能力の発生は、「伝達・コミュニケーション能力」の進化・発達のために不可欠であったのみではない。「言語」は人間の「認知能力」(意識・認識・理解・推論・思考等)を担うメディア・媒体として、人間の知的生活または文明を飛躍的に進化・発達させる原動力でさえあったのである。〈道具的・技術的知能〉と〈伝達の・コミュニケーション的知能〉、そして人間の〈実際の知能〉の集大成とも言うべき〈言語的知能〉の進化・発達によって、人類は他の動物とは決定的に異なった知能、「言語」と「理性」という人類固有の文明世界への道を確立したのである。人間の〈道具的・技術的知能〉と〈伝達の・コミュニケーション的知能〉が「理性」のレ

ベルにまで進化・発達するためには、そのメディア・媒体として「言語」の誕生または発明、言語を作り出し、これを使う能力（言語的知能）が不可欠であったのである。そして、「言語」を用いて意思を伝達し、意思疎通する能力、即ち「伝達の・コミュニケーション的理性」の発生は、人類が知能的に動物のレベルから決定的に分化し、人類独自の進化と発展の道を歩き出した決定的な瞬間であった。

1. 2. 1.

「言語」の意味の二面性（「具象的表象としての観念」と「定義づけとしての概念」、及び「理性または認知（認識・思考等）」は言語をメディア・媒体とし、〈言語体系の進化・発達に応じて〉進化・発達が可能になる。

— 「〈理性によってデザイン・投企された〉観念に従う人の在り方・生き方」（設計図・道標としての観念）

動物や昆虫のなかには、例えばその「巣づくり」にあたって、かなり精密な作業を行なう種類が多く存在する。しかし、それはその動物または昆虫が生まれながらにもっている「本能」、または「遺伝子に書き込まれているプログラム」に従っての行動である。彼らはその「本能」または「遺伝子のプログラム」から外れた行動をしたくてもできないし、そもそもしようなどとは思わない。これに対して人間は、例えばその「家作り」にあたっては、その頭脳の中で事前に組み立てられている「デザイン」、または「家の観念」に従っ

て製作行動を行なう。家作りに限らず、人間はいかなる製作活動においても、「遺伝子に書き込まれている」本能という生得的なプログラム」に応じるのではなく、多少なりとも本能的プログラムから解放され、自らの理性によって自由に構想し、事前に脳裏に描いた〈観念的デザイン〉に従ってその製作行動を行なうのである。人の物作りは動物の物作りとは違つて、「事前に頭の中で言語的・観念的にデザイン・投企され、措定された」目的の観念」を設計図としての物作りである。

これは、動物・昆虫の「巣作り」と人間の大工の「家作り」の違いとして、既にマルクスがその『資本論』の中で指摘したことであつた。マルクスは、動物の本能的な製作行動と人間の「労働」という生産活動の違いについてこう語っている。「蜘蛛は織匠の作業に似た作業をするし、蜜蜂は蟻房の構造によって多くの人間の大工を顔色なからしめる。だが元来、最低の大工でも、最良の蜜蜂にまさっているゆえんは、大工の方は蜜房を、蟻で作るより前に、頭の中で作つているということだ。労働過程の初めに既に労働者の頭の中に、したがつて既に観念的に存在していたものが、労働過程の終わりに結果として出てくるのだ」（『資本論』第一巻、第三篇、第五章、第一節、世界の名著43、中央公論社、昭和48年2月、初版、218頁）。

しかし、これはまた、人間の「物作り」に限らない。人間はそのへもの見方・考え方・行動の仕方・生き方〉に関して、「本能と遺伝子」の支配から多少なりとも解放され、自らの「精神・心」に従つて〈自由〉にデザイン・構想し、事前に〈観念的デザイン〉を作り出し、これに従つて行動するのである。この人間の「もの見方・考え方・行動の仕方・生き方」に関する、「自然必然性」からの自由、「本能的・遺伝的プログラム」からの自由は、理性の媒体である「言語」と「観念」の力に負うているのである。「言語」と「観念」は、「自然・本能の支配からの」精神・心の自由」の基盤を成しているのである。人は「自然・現実から自由な

言語・観念の世界」を具えており、「自然と現実には実在しない」言語・観念の世界」を頭の中で「自由にデザイン・投企」することができるのである。

「言語」の発生・発達と共に「理性」が発生・発達し、「認知」能力（認識・理解・判断・解釈・推論・思考）の高度な進化・発達を可能にした。例えば、或る感覚・知覚的経験を〈馬〉なら「馬」、〈家〉なら「家」というイメージ・心象として意識したとき、その時にそれぞれ「馬の認識」、「家の認識」が成立する。しかし、ここまでの「認識」は、「特定人物」としての自分の飼い主の「イメージ・心象」をもち得る「犬」のように、動物にも起こり得る「認識」である。これに対して人間の場合には、感覚・知覚的経験がただ単にアナログ的に「イメージ・心象」化されるのみでなく、記憶され、意識されて「観念」化され、更には同時にデジタル的に「言語」化され、「言語的観念」として捉えられるという点で、動物の認識のレベルを超えて、「抽象性・階層性・複雑性・繊細性」という点で、理性的・合理的に高度化された認識」が実現されているのである。更に「人間の言語化された」認識」の場合には、馬なら「馬」、家なら「家」のそれぞれの特性から、それぞれの〈種に共通な特性〉を抽出して、その〈共通の特性〉をもっているものをすべてを「同類」としてまとめ、「馬」または「家」と一般化して扱う「概念」化」が可能になる。人の「認知」能力（認識・理解・判断・解釈・推論・思考）は、「デジタル的言語記号」に媒介され、「言語的理性」の進化・発達と並行して、その言語体系の進化・発達に応じて高度な進化・発達が可能になったのである。

20世紀のアメリカの認知心理学者U・ナイサーは、「われわれが現実について知るものは何でも、感覚

的器官に依存するだけでなく、感覚情報を解釈したり、再解釈したりする複雑なシステムによって媒介されている」（『認知心理学』誠信書房、1981年4月、第1刷、3頁）、と、感覚的知覚のレベルにとどまる動物の「アナログ的な」感覚的認知」と、言語による人間の理性的な「デジタル的・言語的な」概念的・概念的認識との違いを指摘している。この「感覚情報を解釈したり、再解釈したりする」複雑なシステムが、「理性」と呼ばれる私たちの認識能力の中核的器官と考えてよいだろう。そして、この「理性」と呼ばれる知能の働き・機能の「複雑さ、精巧さ、深さ、強さ、柔軟さ、そして創造性」は、この理性の基盤を成している。「言語」のそれによって担われ、可能に成っているのである。この「理性」に基づく人類の文明の進化和発達のすべては、「感覚運動的な」アナログ的動物的知能」から「言語的・概念的な」デジタル的人間の理性」への「リングイスティック・ターン」（言語論的転回）によって人類の歴史に導入されたのである。

私たちの意識の対象でもあり内容でもある、世界・現実の印象・心象・表象、または経験が意識され、記憶されたとき、私たちはその「意識された経験・表象」を「観念」と呼ぶ。私たちの脳裏に思い浮かべる「イメージ」または「心象」のことである。17世紀から18世紀初頭のイギリスの哲学者ジョン・ロックは、「観念」は私たちの「外面的世界」の経験、または「内面的世界」の経験」に由来するという。「どのようにして心は観念を具えるようになるか。人間の忙しく果てしない理想がほとんど限りなく心へ多様に描いてきた、あの膨大な観念の蓄えを心は何処から得るか。何処から心は理的推理と知識のすべての材料を我が物にするか。これに対して、私は一語で「経験」からと答える。この経験に私たちの知識は根底をもち、この経験から一切の知識は究極的に由来する。外的可感的事物について行なわれる観察にせよ、私たちが自ら知

覚し、内省する心の内的作用について行なわれる観察にせよ、私たちの〈観察〉こそ、私たちの知性・理性へ思考の全材料を供給するのである。この二つのこと、(経験と観察)が知識の源泉で、私たちのもつ観念、あるいは(本性上)自然にもつことのできる観念はすべてこの源泉から生ずるのである」(『人間知性論』(一)。岩波文庫、2004年7月、第8刷、134頁)。

これに対して、ある物・事の本質的な特徴、つまり、「家とは何か」、「善とは何か」を説明し、定義できる特徴、その物・事の本質的な特徴を共通にもっている物・事を、一括して指し示すのが〈概念〉である。「概念」は、「観念」のような直観的具象性をもつ表象ではなく、経験される多くの物・事に共通の特徴を抽出し、それぞれの物・事に偶然的に属している性質を捨象することによって、物・事の本質を捉える〈抽象的で一般的な定義特長〉として「概念」が成立する。「家の観念」とか「善の観念」と言うとき、「家」や「善」について思い浮かべる「イメージ・心象」を指す。「家の概念」とか「善の概念」と言うとき、「家」とは何か、「善」とは何かという、その物・事の性質に応じて物理的、建築学的、哲学的、心理学的な「定義」を考えるだろう。例えば、「私の家は和洋折衷です」の「家」は「観念」であり、「和風・洋風の家の違いは、先ずその建築材料の違いにあります」の「家」は「概念」である。「彼は一日一善を実行しています」の「善」は「観念」であり、「善は人生の窮極的目的である」の「善」は「概念」であるということになる。

私たち人間は、動物とは異なって、「観念」と「概念」を〈言語化〉し、〈デジタル化〉することによって、〈伝達・コミュニケーション〉と〈認識・思考〉の働きに関して大きな効用性と利便性を獲得し、これによって人間・人類固有の文明・文化を切り拓くことを可能にした。この「言語の効用性と利便性」は、「言語」は

必要に応じて、時には〈観念〉を表わす記号を提供し、時には〈概念〉を表わす記号を提供することにある。「言語」は〈観念〉と〈概念〉との二面性をもっており、その使い方によって、ある時はある「特定な物・事」の観念」を表わし、ある時は「〈物・事の一般的な〉概念」を表わす。人類の文明と文化の進化・発達のために、特に大きな効用性と利便性を提供したのは、物事の本質の〈定義特性〉によって、物事を類別して一般的に表現することを可能にした、「〈概念記号〉としての言語」である。

人は「言語」によって、あるいは「言語」と共に「観念」を構想し、「概念」を構築し、その「観念・概念」を組み合わせて理念・思想・理論を構築する。例えば、ソクラテスは「善」の概念を中心に、プラトンは「イデア」の概念を中心に、それぞれの基礎的概念のセットを考案し、それぞれの哲学の世界を構築した。17～18世紀の西洋の近代への入口で、ニュートンは「万有引力」の概念に基づいて、近代の物理学と科学的宇宙観を確立した。19世紀の西洋でマルクスは、労働、資本、剰余価値、利潤、階級、ブルジョア、プロレタリアなどの概念を考え、これによって新しい経済学の理論と新しい社会観を構築した。また、19～20世紀の現代への入口で、人間の「意識」の概念を中心テーマとして、人間の精神・心の解明に取り組んできた旧来の心理学・精神科学に対して、フロイトは「無意識」の概念を発見し、この無意識の概念に基づいて、精神分析、深層心理、潜在意識、抑圧、心的外傷、エディプス・コンプレックス、リビドーなど、新しい概念・言語の発見または発明によって、画期的な新しい「精神・心の見方・考え方」を開示したのである。

そして、「〈本能的・遺伝子的プログラムから自由な〉言語と理性」に基づいて、「理性」と「認知」の〈自己拡張可能性または創造性〉と「言語」の〈自己拡張可能性または創造性〉が互いに補足し合い、補強し合う

て、互いに進化し、発達し合ってゆくことになる。

1. 2. 2.

「〈理性によって自らデザイン・投企した観念によって在り・生き・動かされる〉人間の観念感受性」、及び人間と動物の違いを示す「〈道徳・倫理などの〉観念の質の高さ」

—「〈言語と認知・理性の創造性を保証する〉レトリック・修辞法」、〈理性によりデザイン・投企される〉存在するものの存在の窮極的目的」、及び「〈目的に応じる〉存在するものの存在の価値・意味」

人間・人類の知能が感覚的レベルから理性的レベルへの高度化が可能になったのは、知能のメディア・媒体または知能の道具・手段としての「言語」が発明され、誕生したことによる。この「言語」が発明され、誕生した後、「理性」と呼ばれるようになった人間・人類の知能は、言語体系の進化・発達と共に進化・発達し、この理性の進化・発達が同時に言語体系の進化・発達を呼び起こしてゆくのである。このように「理性」と相互啓発の関係にある「言語」は、その固有の語彙規則・文法規則・構文規則などの言語規則、及びレトリック・修辞法という言語技法によって、自己拡張・創造を図り、言語体系の進化・発達を実現してきた。

人間・人類の知能レベルが動物のそれから決定的に分化し、人間・人類固有の文明への道を拓いたのは、

人間・人類の「ものの見方・考え方・行動の仕方・生き方」が、本能・遺伝子の直接的な支配から自由に、〈言語〉媒体によって制御されるようになったことによる。つまり、「〈言語〉によって本能・遺伝子から自由になつた」言語的理性」によるのである。

人間の行動は、動物の行動の場合とは異なり、遺伝子に組み込まれたプログラムによって直接的・本能的に生ずるのではなく、「言語」を媒体として行為者の頭脳の中で描き出される、〈観念的デザイン〉を「設計図」または「道標」として生まれてくるのである。そして、この〈観念的デザイン〉は、観念の〈言語〉記号化によつて間接的に操作・制御することが可能であり、そのために「理性」によつて操作・制御する余地、つまり〈自由〉が大きくなつている。「言語」という人類の最高級の発明品の媒介力によつて、人間はその「認識・意識・理解・判断・思考等」の認知の諸活動において限らない〈拡張〉の可能性、そして「〈精神・心の〉自由」を獲得したのである。その結果、「〈言語の表現技法である〉レトリック・修辭技法」には、「〈言語〉の限らない拡張の可能性」が保証されているのみならず、「理性の拡張性・創造性」、「〈精神・心の〉自由」が保障されているのである。

現実または経験に対応する「言語」の〈対応力〉と〈適応力〉である「レトリック・修辭法」は、限らない〈柔軟性〉と〈創造力〉をもつており、この「言語」の「〈現実・経験〉に対する対応力・適応力である」レトリック・修辭法」によつて、人間の理性・精神、人間の思考・思惟はその機能において限らない「拡張性・創造性」、〈高度化・多様化・複雑化・抽象化〉の可能性を与えられたのである。この人類の発明品である「言語」は、ただ人間の「社会的行動」のための媒体・メディアとして有効な働きをするばかりではない。「言語」の構造の〈公節性〉と〈文法性〉によつて、〈拡張可能性〉または〈創造性〉に富んだ「認知」（認識・理解・判断・意識・

思考等)を可能にしたのである。

物を作り出す製作行動に限らず、人が何か行動する場合は、動物の場合のように遺伝子に書き込まれているプログラムから、本能的に行動が生まれるのではなく、「目的」として行為者の頭脳の中に描かれている何らかの「観念的プログラム」から、その行動が生まれてくる。つまり、人間の行動は、人が考え出す「観念」を設計図または道標として生まれてくるのである。マルクスはここまでを洞察していた。マルクスは『資本論』での人間の「生産活動」についてのその論述において、「本能によって」のみでなく、また「観念によって動かされる人間」という事実を間違いなく把握していたのである。つまり、人間の製作行動には何らかの「観念」が〈設計図〉として意識され、その生き方には何らかの「観念」が〈人生の道標〉として意識されているのである。

さらにマルクスは、この人の行動の動因になる「観念」は、人の行動の「目的」の意識に関連する観念であることを明確にしている。「労働者は自然を変形させるだけではない。同時に、自然のうちに自分の目的を実現させるのだ。その目的は彼の知っているものであり、彼の行動を律し、さらに、彼の意志をそれに従わせねばならないものである。しかも意志を従わせるだけで終わるのではない。労働する器官の緊張のほかに、注意力として現われる合目的意志が、労働の全継続期間にわたって必要なのだ。しかもこの合目的意志は、労働の内容とその仕方が、労働者にとって魅力が少なければ少ないほど、したがって労働者が労働を自分の肉体的精神的な活動として楽しむことが少なければ少ないほど、ますます必要とされるのだ」(マルクス／エンゲルス『資本論』中央公論社、世界の名著43、218頁)。人間の「物を作る行動」、制作活動と

しての「労働」は、或る何らかの「合目的」の観念」に動機づけられ、制御される「合目的」的行動」だということである。

人は何のために生きるのか、人の生存の「窮極的目的」は何か、——人は人生の窮極的目的を知ると、この目的に従って自らの経験の価値を知り、意味を知ることになる。人は「合目的性」の原則に従ってものを見、ものを考えるのである。人間も他の動物と同様に、基本的には「個体と種の保存」という、「生物的・本能的な遺伝子レベルの目的」をもって生きている。しかし、人間は言語的・観念的に「目的」を自らデザイン・構想し、世界を「合目的」化して、「合目的」的に生きるようになる。言語的・観念的に「目的」をデザイン・構想し、この「合目的」の観念に従って行動し、生きることに、人間と動物の「行動の仕方・生き方」の決定的な本質的差異が存在するのである。

エンゲルスもその論文『猿の人類化への労働の関与』でこう語っている。「要するに、動物はただ外的自然を利用するだけであり、単に自己の存在によって自然のうちに変化を起こすに過ぎない。人間は自己の変化によって、自己の目的に自然を従わしめ、自然を支配する。そしてこれが人間と自余の動物との最終の本質的差異であり、この差異を惹起するものはやはり労働である」(『唯物史観』、向坂・岡崎編訳、大月書店)。人間は「自己の目的」を「観念・理念」の形でデザイン・構想し、世界をその「目的」に合わせて「合目的化」し、すべての物事をこの目的に合わせて「価値化」し、そしてその目的と価値に従って「意味化」し、「秩序づける」のである。人間は、「個体と種の保存」に関する本能的・遺伝子的意味を超えて、「言語的に可想的で観念的な」意味の世界、「秩序づけられた世界」を創り出し、そこに生きるのである。

しかし、この世界と人生を〈合目的化〉し、〈価値化〉し、〈意味づけ〉し、そして〈秩序づける〉という「理性」の働きは、そもそも古代ギリシアに「哲学といふ」ものの見方・考え方が生まれて以来、西洋の「理性」の歴史、西洋の知識人・思想家の歴史と共に進化し、発展してきたものであった。例えば、西洋の知識人・思想家の大先覚であるソクラテス／プラトンは、「人の生存の窮極的な目的は何か」を考え、この「目的」を追究することに〈人生の意味〉を見出した。「人生の窮極的な目的」を見出したなら、人はこの「目的」の追求に合わせて「自己実現」を図ることになる。人はこの「〈人生の〉窮極的な目的」に合わせて自らの世界と人生を〈合目的化〉し、〈意味化〉し、〈秩序づけ〉て生きることになる。単に肉体的な「個と種の保存」のためだけではなく、「自己実現としての人生」を生きているのである。人はこのように特定の「〈目的〉の観念」を基盤にして「〈価値づけられ、意味づけられ、秩序づけられた〉世界」の中で、〈価値づけられ、意味のある〉「生」を生き、「〈価値づけられ、意味のある〉死」を死ぬのである。

イギリスの古典学者 R. S. ブラックはこう語っている。「プラトンの哲学の基礎に置かれたのは、ソクラテスの抱いていた確信であった。すなわち、この世界には一つの目的が存在すること、人はこの目的の本性およびそれと彼自身との関連の発見に努めるべきであること、そして、一旦それを発見したならば、その人は自分の生き方をそれに一致させるよう望むであろうことがそれである。この目標あるいは窮極的かつ恒久的な真理を、プラトンは唯一の確実な行為の指針と考えた」(『プラトン入門』岩波文庫、2002年11月、第8刷、47頁)。「〈存在するものの存在〉の目的」は、西洋の理性史の中で生まれ、育った「哲学」が、長年にわたって問い続けた主題であった。

学習の能力をもっていることが知られている猿類や犬は言うまでもなく、ビーバーやミツバチなど多くの動物や昆虫が、特にその優れた「巣作り」の能力についての観察がなされている。しかし、これらの動物や昆虫の知的能力については、「本能・遺伝子」、「自然的衝動」、「遺伝子情報」などの概念で説明されてきた。動物は「本能・遺伝子」によって問題を解決し、処理する。これに対して人間の場合には、関心、注意、記憶、連想、想像、推論、思考などの「認知」諸能力から成る「意識」、またはそれら「認知」諸機能を統合する「理性」の働きとして説明される。人間は先験的認知能力として「意識」と「理性」を具えており、これによって問題を解決し、処理する。動物は「本能」によって問題を解決し、処理する。このように、人間と動物の違いを「意識と理性」の有無に求めるといふ、単純な割り切り方については、19世紀のイギリスの進化論の創始者、ダーウィンは重大な異論を呈している。

「最近刊行されたいろいろな論文から判断するならば、動物は抽象力とか一般的概念を形成する能力を全く欠いていると仮定する点に、最も大きな重点が置かれているようだ。しかし、あるイヌが遠くに別のイヌを見て、抽象的にそれがイヌであると知覚しているな、ということがよく分かる場合がしばしばある。というのは、もしそのイヌが友だちであるならば、近づくと急に態度がすっかり変わるからである。最近ある著者は、このようなすべての場合に、精神的な行為が人間と動物とでは本質的に同じ性質のものではないと、断定することは、まったくの臆測にすぎないのだと述べている。もし人間と動物のどちらか一方が、自分の感覚で知覚するものを精神的概念のせいだとするならば、両方ともがそうなのだ」(ダーウィン『人類の起源』中央公論社、世界の名著39、第一部、第三章、昭和42年9月、144頁)。

感覚・知覚能力が具えている「観念・概念のセット」によってものを認識するという点で、人間と動物に

違いはない。動物も人間と同様に「抽象能力」と「一般的概念を形成する能力」を有していることは、私たちの動物の行動に関する経験から認めざるを得ないことである。人間と動物とを分かち、区別させるのは、「意識」の有無、「観念・概念」の有無」ではなく、「意識の発達の程度の違い」である、とダーウィンは言うのである。「高等な動物が、記憶力、注意力、連想力、そしていくらかの想像力や理性をもっているということは、一般に認められている。種々の動物の間で大いに異なるこれらの能力が、もし改善されるものであるならば、より高次な抽象的概念や自意識のような、もつと複雑な能力は、より単純な能力が発達したり、それらが結合したりすることによって、進化してきたのだということは、それほど不可能な推論のように思われない」(ダーウィン上掲書、145頁)。

「すぐれた記憶力と、彼の夢によって立証されたような、何らかの想像力とを持つ一頭の年老いたイヌが、昔猟で獲物を追跡中に感じた楽しみや苦痛を、決して思い出したりしないなどということが、どうして分かるだろうか。そして、これは一種の自意識であろう」。しかし、ダーウィンはここで、人間と動物の「意識」「観念・概念」の決定的な質的違いについて語っている。「もし、動物が、自分はどこから来たか、どこに行こうとしているのか、あるいは生とは何か、死とは何か、等々の事柄を思い案ずることが、自意識という用語によって表わされるとするならば、動物は自意識がないということは、何の抵抗もなしに認められるかもしれない」(ダーウィン上掲書、145頁)。

動物が記憶や想像などから成る「意識」を持っていることは否定できないが、人間は、動物にはあり得ないような「意識内容」をもつことがあり得るのである。その「意識」では、ある種の「高度な観念」が重要な役割を果たしている。ダーウィンは人間の「意識」と動物の「意識」の比較において、人間の「意識」で

重要な役割を演じる「〈道徳〉観念」を挙げている。「私は、人間と人間より下等な動物との違いの中で、〈道徳観念〉あるいは〈良心〉が、きわめて重要であると言っている著者たちの判断には全く賛成である」(「ダーウィン上掲書、158頁」)。

人間は、動物とは異なり、「ものの見方・考え方、行動の仕方・生き方」を導き、制御し、決定する働きをもつ「観念」を、自分自身でつくり出し、保持する能力としての「理性・実践理性」を具えている。人間は知能の発達過程で、「自らの過去や未来の行為あるいは動機を比較することができ、それらを是とした非としたりすることのできる存在」、また、「愛情、同情、自制が習慣によって強められ、理性の力がよりはつきりしてきて、その結果、仲間の判断を正しく評価することができるようになると、人間はその時その時の喜びや悲しみから離れて、ある方向をもった行為に自分自身が駆られてゆくのを感ずるようになる」、即ち「道徳的存在」に成る、とダーウィンは言う。人は「理性・実践理性」と呼ばれる知能の発達の結果、自らが作り出したある種の観念、「善・悪」、「正・不正」、「徳・不徳」などの観念によって、その「ものの見方・考え方・行動の仕方・生き方」が導かれ、制御され、規定されるようになるのである(「ダーウィン上掲書、170、172頁」)。

つまり、人はその「ものの見方・考え方・行動・生き方」において、善、正義、徳などの「道徳的観念」によって影響され、制御され、規定されることがある、そういう存在なのである。人間は「本能」によってのみでなく、「観念」によっても動かされる動物である。つまり、人間は「自然的本能」によってのみでなく、自らが理性によって言語的にデザイン・投企する「言語的観念」または「〈哲学・道徳・倫理〉的観念」によって動かされる存在